

## X. 石切場跡 2

## X. 石切場跡2

### 調査の概要

石切場跡2は出雲市上塩治町に所在する大井谷の入口から程近く、南側に入った丘陵斜面の標高約60m~70m付近に位置している。平成9年（1997）に試掘調査によって発見された石切場で、試掘調査時には横穴墓の存在が想定されたことから、東西方向にセクションベルトを1本設定し、その他の部分は岩盤（凝灰質砂岩）までの堆積土を除去した。

その結果、横穴墓は確認されなかったが、標高約64.00mと62.30m付近にはそれぞれ平坦面が確認され、その側面に残る岩盤の一部には明瞭な加工痕が認められた。このことから、当該地が石切場として利用されていたと判断し、発掘調査を実施することとした。なお、試掘調査の際、煙管が1本出土している。また、石切場跡2の周辺には、南西丘陵上に三田谷3号墳、丘陵斜面に上塩治横穴墓群第19支群・第38支群、西方丘陵斜面には上塩治横穴墓群第18支群が存在しており、この周辺が墓域として利用されていたことが窺われる。

発掘調査は平成10年（1998）6月23日から開始し、再度現地踏査を行った後、明瞭な加工痕が残る2ヶ所について、それぞれ北側からA地点・B地点とした（第121図・第122図）。そして、A・B地点での立面・平面図の作成のほか、セクションベルトにおける堆積土の確認などを行った。また、空中写真測量により、岩盤までの堆積土を除去した南北長約40m、東西長約20m、奥行き約30mの範囲を図化し、同年7月24日に調査を終了した。

### 堆積土の状況（第123図）

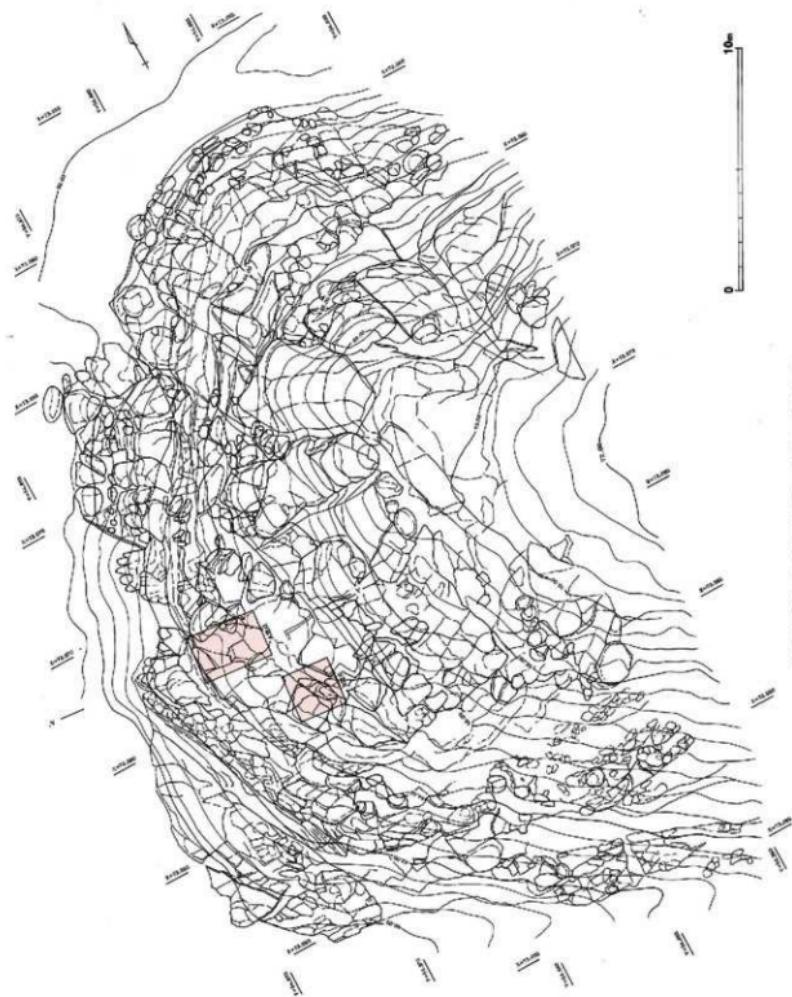
調査地は急峻な斜面のため、現表土はそのほとんどが崩落し丘陵下へと流出している状態で、セクションベルトの上方にわずかに認められる程度であった。また、上方と下方ではかなり堆積土の状況は異なっている。

上方における基本的な層序は、現表土の下には腐食系の土が堆積し、その下に旧表土に相当すると考えられる黒褐色系の土（10層～12層）が堆積している。さらに下層には風化レキを多量に含む崩落層が続き、最下層には褐色系土（18層～21層）がわずかに堆積して地山である凝灰質砂岩に達している。

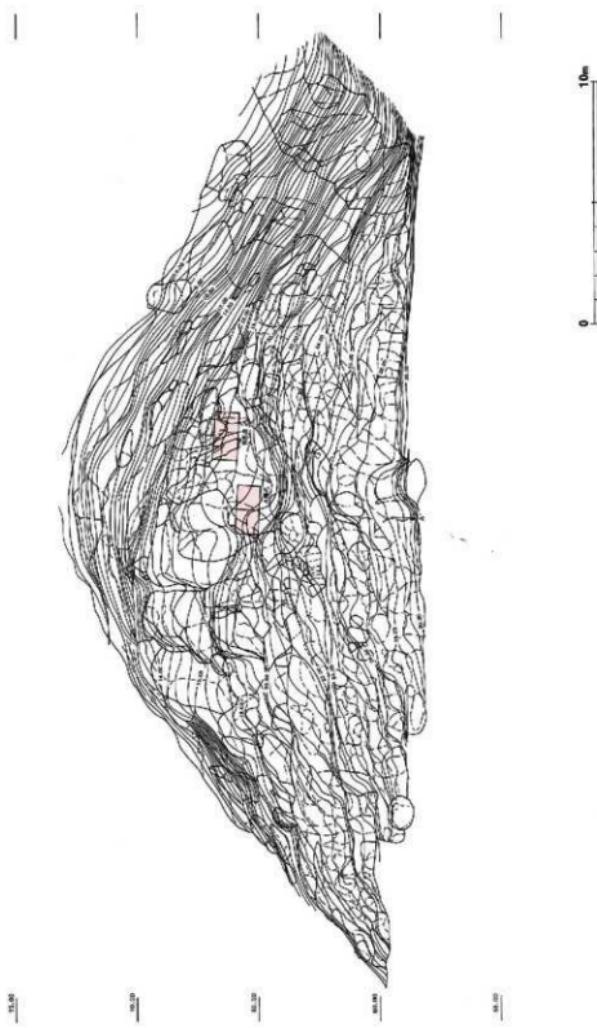
一方、下方では旧表土ばかりか現表土もほとんどない状態で、上方で確認している旧表土の下位層に相当する人頭大の石を多量に含む崩落層が堆積し、地山へと達している。なお、最下方に堆積している46～52層は山廻りレキ層で、地山（凝灰質砂岩）に相当するものと考えられる。

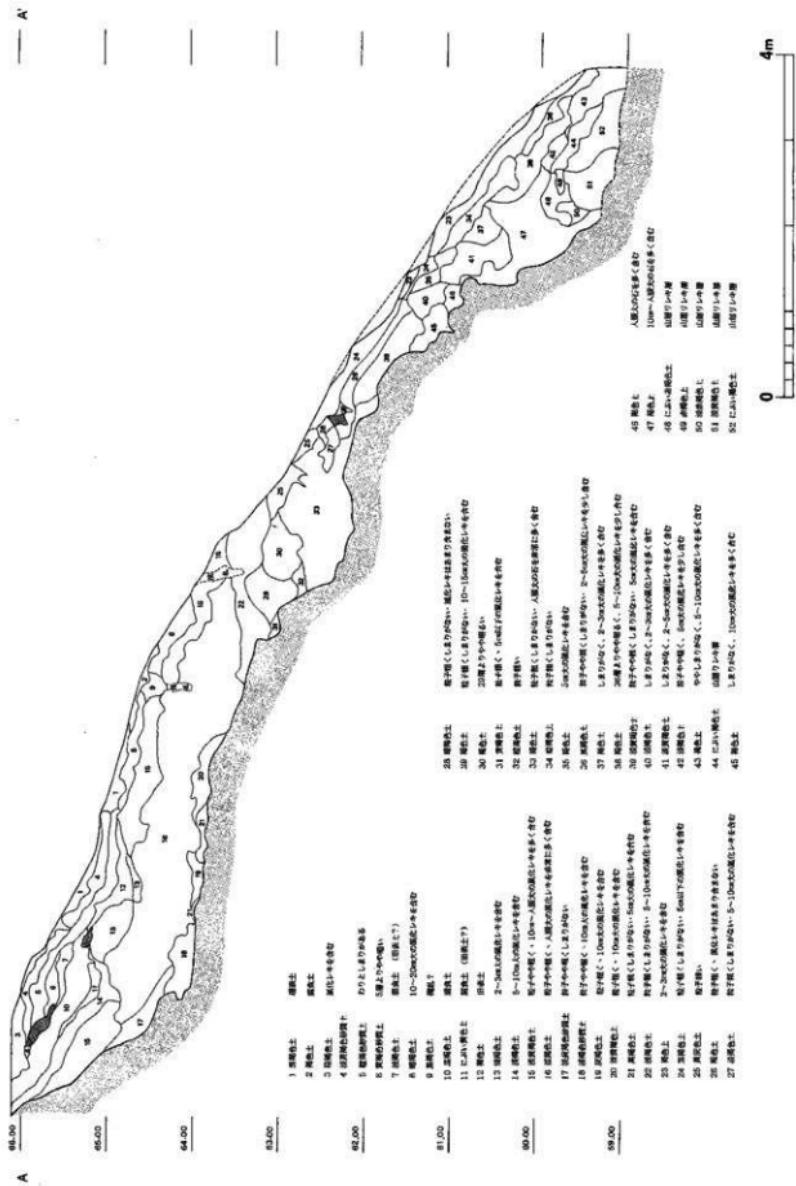
これら上方と下方における堆積土の違いについては、次のように説明できる。前述したようにセクションベルトラインにおいても平坦面がある。この状況から推察すれば、石を切出して平坦面となつた部分では石切場として利用されなくなった後、比較的の短期間に大量の土が崩落し、一気に溜まったったものと考えられる。その後、やや平坦地化した上方には旧表土が堆積するが急斜面となった下方では崩落が繰り返され、旧表土は堆積しなかったものであろう。すなわち、セクションベルト上の旧表土より上層を除けば、そのすべてが二次堆積層（崩落層）と考えられる。

第121図 石切場跡2 全体図（平面）



第122圖 石切場跡2 全體圖（立面）



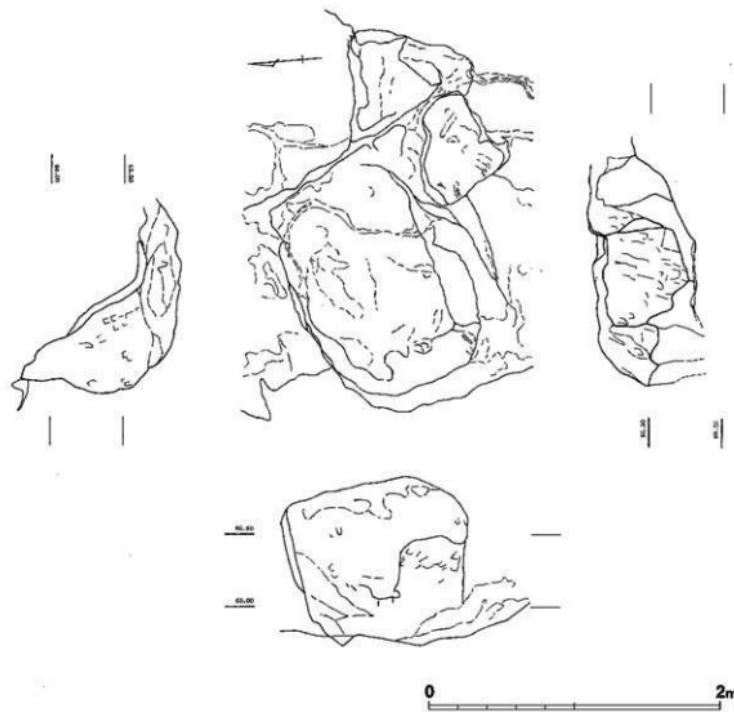


第123図 石切場跡2 セクション図

### 石切場の状況

岩盤（凝灰質砂岩）までの堆積土を除去した状況で観察する限り、明瞭な加工痕が残っているのは2ヶ所であり、それぞれをA地点・B地点とした。なお、A地点から南北に約5m、東西に約3m、B地点から南北に約5m、東西に約4mの範囲には平坦面が認められ、その側面にあたる岩盤で加工痕が認められている。この平坦面を中心に石切場として利用されている事は明らかであるが、平坦面では明瞭な加工痕は認められていない。これは、切出しの技術とともに側面と底面における使用工具の違いによるものと考えられる。

また、その他の地域においては加工痕は認められなかったが、これは明らかに風化が著しい岩盤であることが要因と考えられ、そのほとんどが石切場としては利用されなかつたものであろう。よって、石切場としては良質な石材の残る一部分を切出した小規模なものであると考えられる。



第124図 石切場跡2 A地点実測図

### A地点（第124図）

A地点は、標高約64.30mから65.90mの間に位置している。この地点から南に約5m×3mの範囲が石切場として採石された部分と考えられ、平坦面となっている。

A地点はその南側面にあたる岩盤と考えられるが、その大岩は南北長約1.8m、東西長約1.0m、高さ約1.1mを測り、その西側及び南側に加工痕が認められる。特に南側において顕著に認められ、その幅は約5cmを測り、そのすべてが同一の工具によるものと考えられる。また、西側にも同様の加工痕が認められていることから、西側（下方）の石も切出されたことが明らかである。

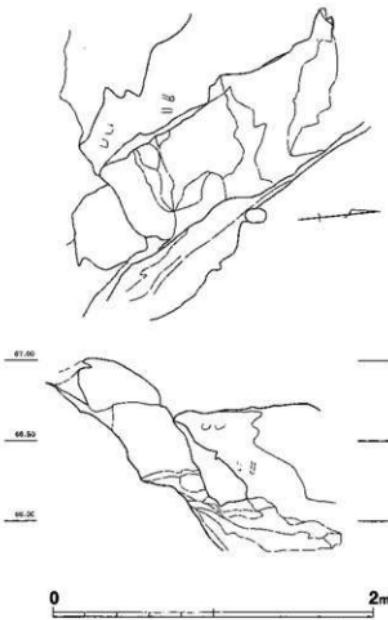
そして、大岩の上面には明瞭な加工痕は認められないが、ほぼ平坦となっていることから、上面を切出している可能性がある。これは、岩盤の側面と底面における切出し技術や使用工具の違いなどから残っていないものと考えられる。

石切場が築かれた時期については、岩盤直上からの出土遺物が全くないため、判断し難い。しかし、セクションベルト上の崩落上（13層）から古墳時代後期頃以降のものと考えられる袋状鉄斧が出土していることから、最も遙るとすれば、当該期に利用された石切場である可能性を示している。

### B地点（第125図）

B地点は、標高約65.80mから61.00mの間に位置し、その中心はセクションベルトから約3m南にあたる。この地点から北の約5m×4mの範囲にはA地点と同様に平坦面が認められる。B地点はその南側面にあたる岩盤であり、石材がほぼ垂直に切出され、東西に約70cm、高さ約80cmほどの凹みを有している。このことから、ほぼ立方体状の石材を切り出したものと推定される。また、加工痕は採石された西側面でわずかに確認できる程度であるが、A地点で確認された幅約5cmの工具痕のほか幅約2cmの異なる工具痕も認められた。おそらく採石する石材の大きさや形、硬さなどによって使用工具を選定していたものと考えられる。

これらA・B両地点から広がる平坦面の岩盤は、他の地域にある風化の著しい岩盤に比べると良質であることが石切場として利用された要因であろう。



第125図 石切場跡2 B地点実測図

## 遺物（第126図）

遺物には、煙管と袋状鉄斧が各1点出土しているにすぎない。

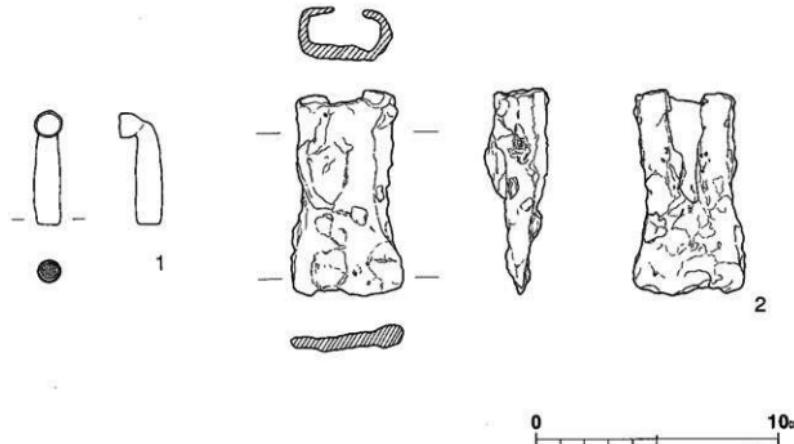
第126図-1は、銅製の煙管の雁首部分である。表土掘削時に表採されたものであり、火皿径1.2cm、長さ4.6cmを測る。なお、木製の柄が差し込まれていることが下端部で観察される。第126図-2は袋状鉄斧である。長さ8.5cm、刃部の幅は4.5cmを測り、柄の装着部の奥行は約3.5cmを測る。

セクションベルト上の13層からの出土であり、A・B地点に残る工具痕とも幅がほぼ一致することから、石切場が築かれた時期に近い遺物であると考えられる。なお、袋状鉄斧については時期的な編年が確立していない状況であるが、形状的には古墳時代後期頃以降のものである可能性が強いのではないだろうか。

## 小結

石切場跡2は、残存状況があまり良くないうえ良質な石材もあまり採れなかったようで、石切場としては小規模なものであった。しかしながら、石切場として利用されていた当時のものと考えられる袋状鉄斧が検出されるなど当時の人々が良質な石材を求めていた様子が窺える資料として興味深い。

また、この石切場が凝灰質砂岩であり、古墳時代後期頃のものである可能性も考えると、周辺に所在する後期古墳や終末期に築造された横穴墓の石室や石棺の存在を考えるうえでも興味深い資料であると言える。

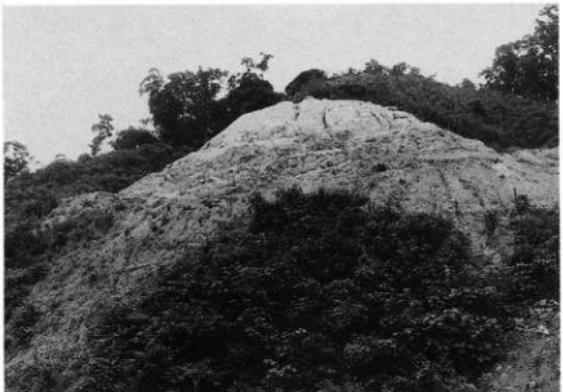


第126図 石切場跡2 出土遺物実測図

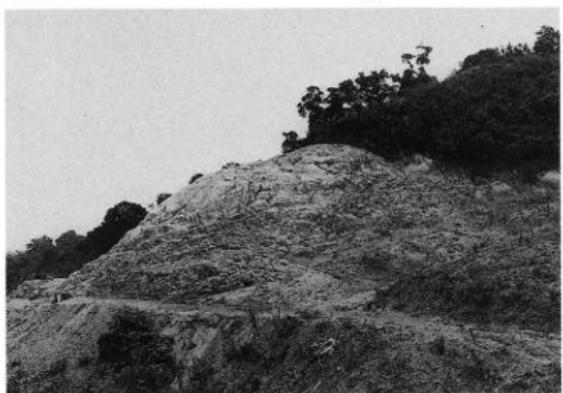
石切場跡 2

図版

石切場跡2全景（西から）



石切場跡2全景（南から）



石切場跡2堆積土状況

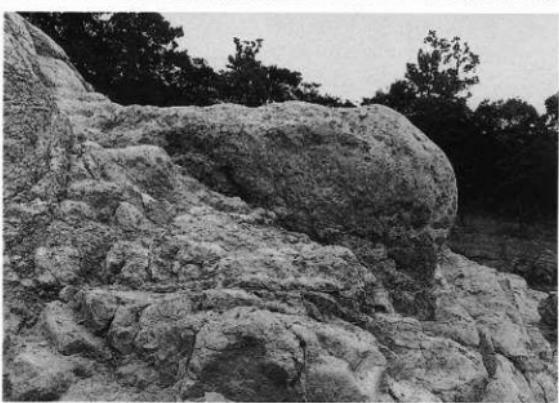




石切場跡2堆積土状況（上部）



鉄斧出土状況



石切場跡2（A地点：北から）

石切場跡2（A地点：南から）

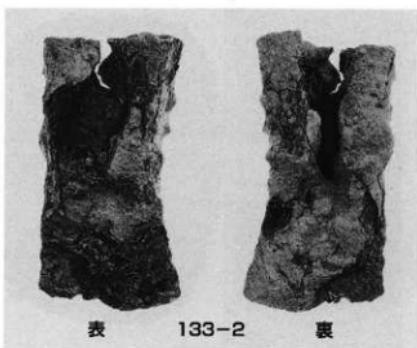
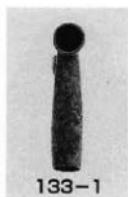


石切場跡2（A地点：東から）



石切場跡2（B地点：北から）



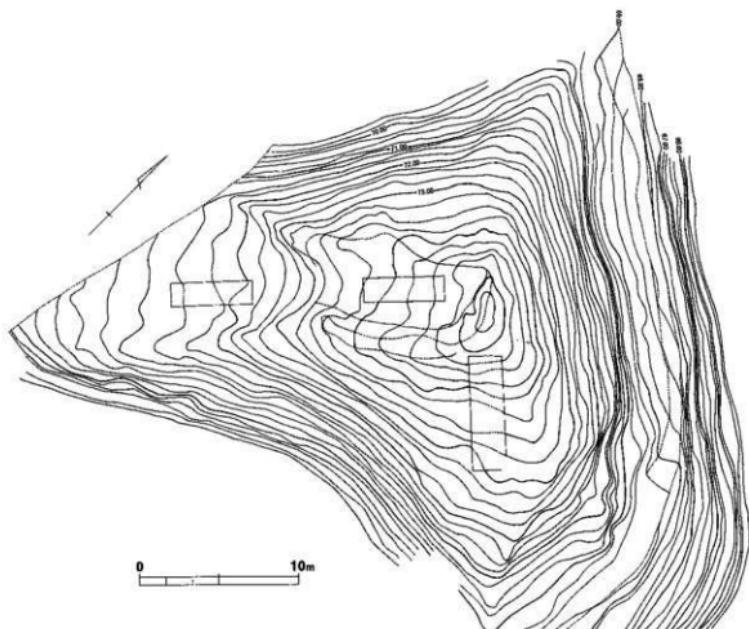


## XI. 三田谷3号墳

## XI. 三田谷3号墳

三田谷3号墳はこれまで知られていない古墳であり、上塙治横穴墓群第19・38支群が造墓されている尾根上に築造されている。当初この場所には平坦面があり、付近に大井谷城跡や半分城跡が位置していることからも山城跡の可能性を考え平成9年度に調査を行った。トレンチによる確認の際に列石が出土したため、遺跡と確認し本調査にはいることとなった。

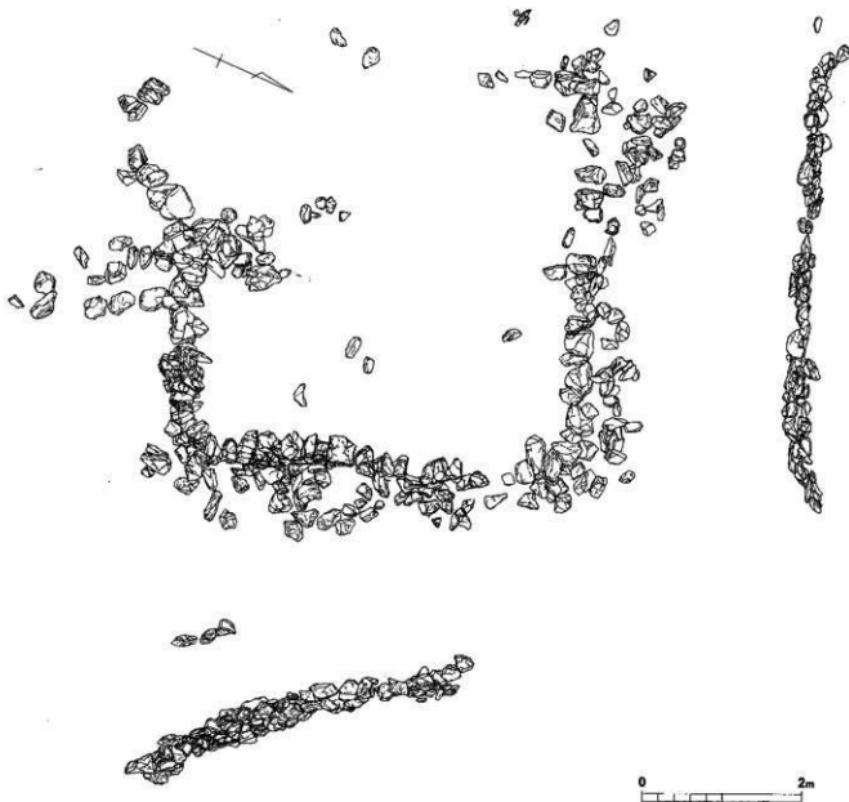
なお、本調査は平成9年7月～平成10年8月にかけて実施された。



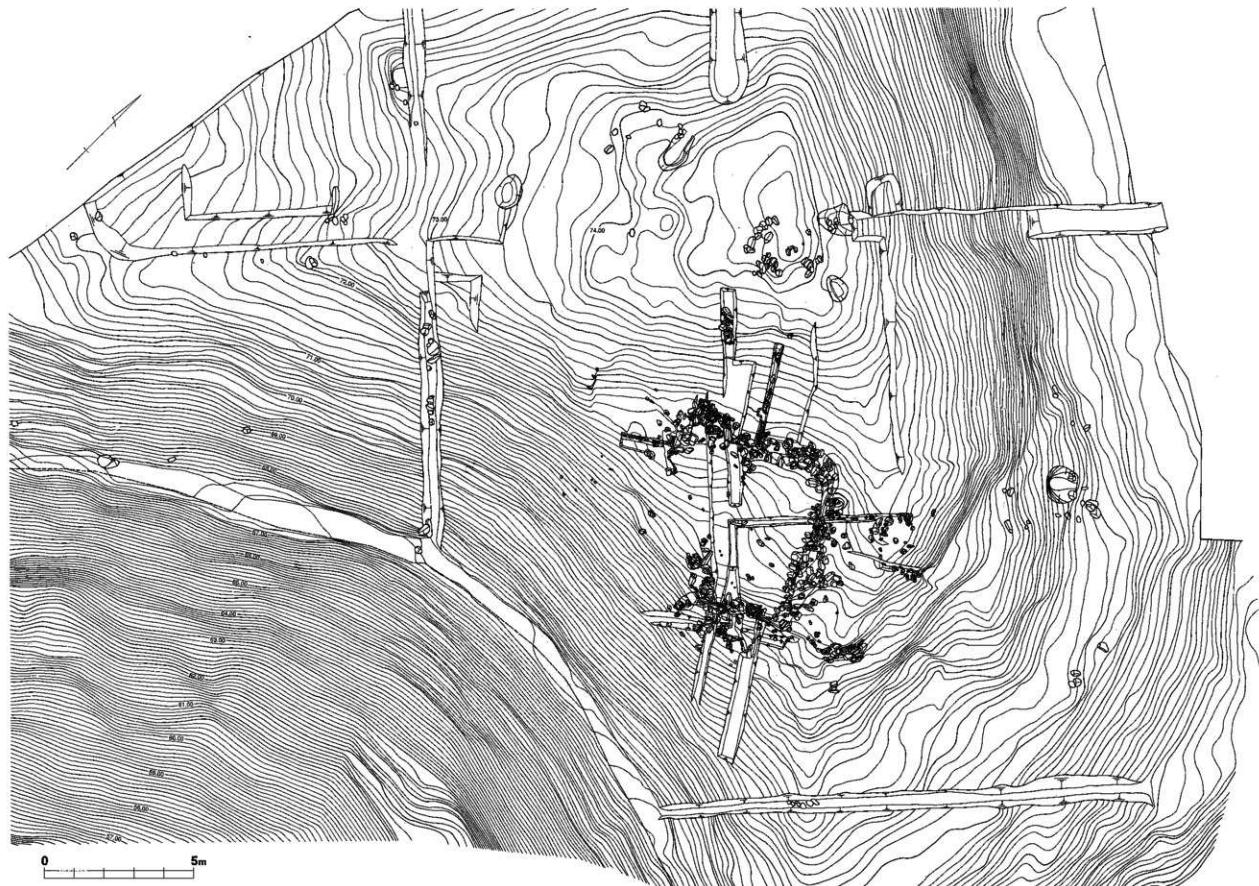
第127図 地形測量図(調査前)

## 墳丘

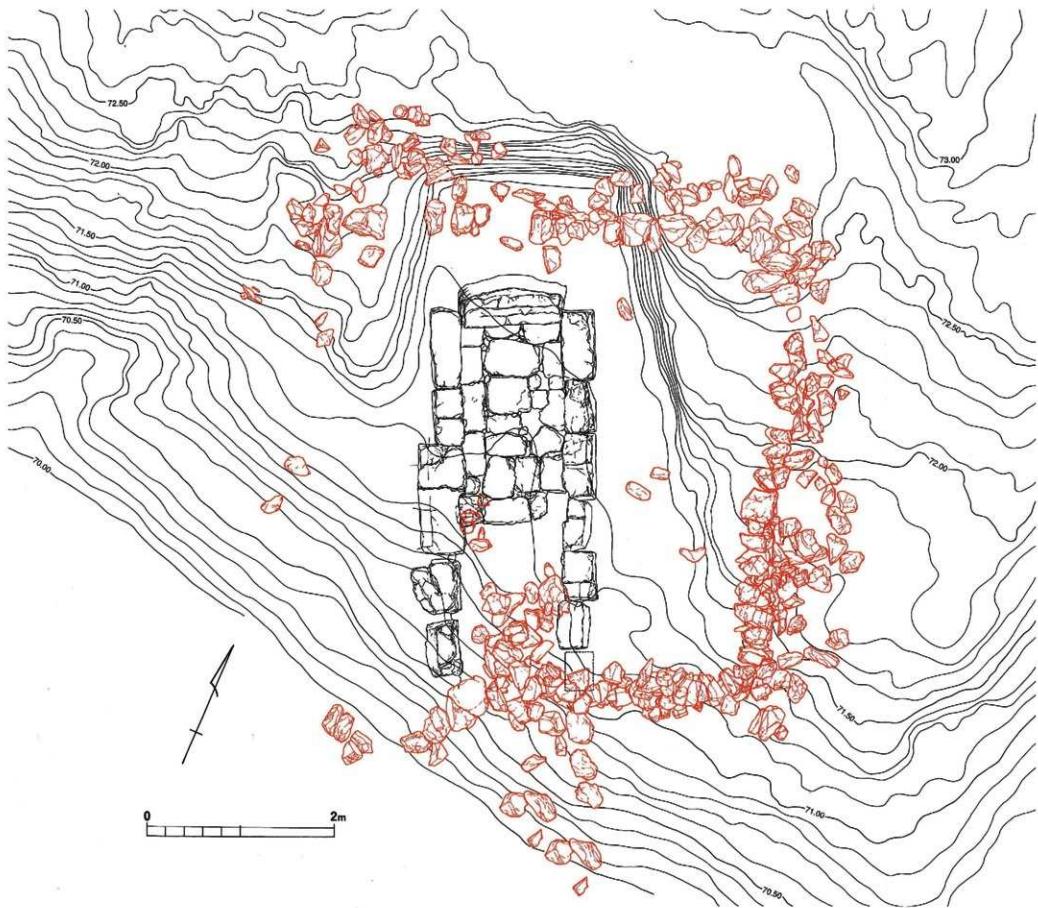
東西5.5m、南北6.0mの方墳であるが、墳丘のほとんどは流出して失われており、高さについては不明である。墳丘は岩盤の高まりを利用して築造されており、それ以上の高さについては盛土によって補っていたと考えられる。



第128図 外護列石



第129図 墓丘及び周辺地形測量図



第130図 地形測量図

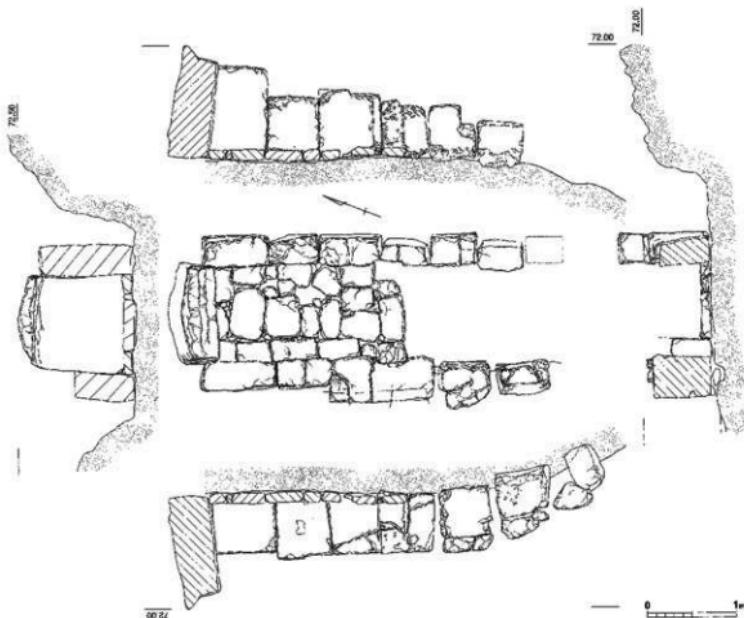
### 外護列石

墳丘の周りには外護列石が巡らされている。石材としては長細い石を利用しており、長辺を墳丘の中央方向へ向けて積まれている。高さについてはほとんど残存していないが、東半分では5段から6段の石を積んでおり、高さ70cm程が確認できた。また、墳丘のほとんどが流出しているが、石室の高さを考えると墳丘南側では最低でも約1.3m程は積まれていたものと考えられる。外護列石が墳丘の中にはまりこんでいることから、墳丘を盛りながら外護列石も同時に構築していったと考えられ、土層の堆積状況からもその様子をうかがうことができる。

また、墳丘の南西側においては外護列石が墳丘とともに流出しており、これを認めることはできなかった。

### 周 塚

岩盤のレベルの高い墳丘の北側と東側では浅いものの周塚が設けられている。周塚は岩盤を掘削して造られている20cm程の深さの溝であるが、底は水平ではなく傾斜が付くために見かけはもっと深く見える。また、周塚は上方から下方への排水の機能も果たしていた可能性も考えられる。



第131図 石室展開図

## 横穴式石室

内部主体として凝灰岩切石で構成された横穴式石室を検出している。盗掘のためか石室上部は失われている。石室はN~21°~W方向に開口しており、ほぼ南側を向く。

石室規模は全長1.85m、玄室幅0.53m、長さ0.84mを測る。なお、高さについては上部の損壊のために不明である。しかし、古墳時代終末期の古墳であると推定すれば、奥壁が1枚で構成されていた可能性もあり、そうであれば床石から天井までの高さは0.98mであったと考えることができる。

石室は岩盤を掘削し平らに成形した上で構築されており、正面からの見かけの高さは裏面に比べると格段に高く見えたと思われる。

奥壁は側壁や袖石と比較すると格段に大きな凝灰岩を使用している。奥壁に特徴的なのは裏側が緩やかなカーブを描くように加工されていることである。この加工については、どのような役割を果たしていたのか明確な知見を持たないが、奥壁が倒れたりしないような配慮からかもしれない。

側壁については左右とも1枚の石材が残っていた。最奥の側壁においては左側壁の石材が右側壁に比べ半分ほどの高さしかなく、左側は2段に構築されていたと思われる。

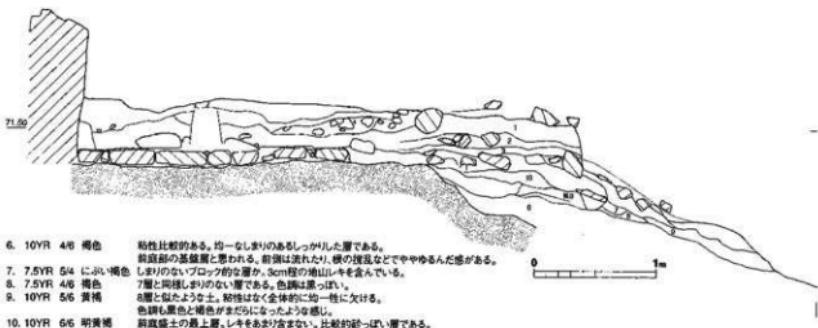
石材の使用方法は巧妙である。玄室の袖部分では袖石をはめ込むために側壁を加工している。また、床面ではいくつかの立方体に加工された凝灰岩を側壁沿いに隙間なく並べ、石室中央部分については比較的大きな凝灰岩を用いている。その隙間を開いたスペースには小さな凝灰岩を入れ込んで隙間を塞いでいる。

なお、羨道部分の床には凝灰岩を検出することができなかっただため、袖の部分までしか凝灰岩を敷いていない可能性が考えられる。

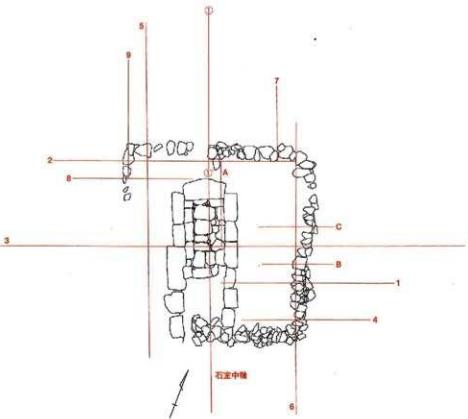
## 内部主体土層堆積状況

石室内部の土層堆積状況は整然としており、盗掘後の自然堆積であると考えられる。この中には凝灰岩の破片も多く含まれており、盗掘時における石材の搬出も考えられよう。なお、岩盤の傾斜の関係で玄門部分より外側については盛土による石室床面の造成がなされていることが観察できた。(10層以下)

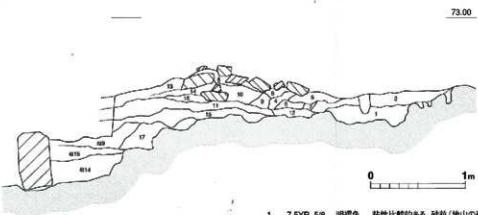
また、石室構築時の裏込土の層も残存していた。側壁の裏込土はあまりしまっておらず、突き固めた様子



第132図 内部主体土層堆積状況①



第133図 セクションライン



1. 7SYR 56 明褐色  
粘性比較的ある。砂山(砂山の影響が柱子になったもの)を多く含んでいる。  
基盤の辺に元からたまっていた土かしれない。
2. 10YR 4/6 黄褐色  
基盤。
3. 7SYR 56 明褐色  
周溝上層の風土層と同じものか。色調濃っぽく黄が多い。
4. 10YR 4/4 黄色  
基盤。
5. 10YR 5/6 明褐色  
基盤。
6. 10YR 4/6 明褐色  
地山のブロックが多く含まれている。
7. 10YR 4/6 黄色  
しきなく鉄質な感じである。
8. 7SYR 4/4 黄褐色  
砂山の影響で、砂山の影響を受けた風土と同じかと思われる。または移矯層。  
砂山の影響で、砂山の影響を受けた風土が混ざるような風土。しかし比較的ない。
9. 7SYR 56 明褐色  
比較的泥のついたけない一つな層。粘性あり。
10. 7SYR 56 明褐色  
板状構造で層つきよくなる。風化度も高い。
11. 7SYR 56 明褐色  
板状構造で層つきよくなる。風化度も高い。
12. 7SYR 56 明褐色  
板状構造で層つきよくなる。風化度も高い。
13. 7SYR 4/6 黄色  
粘性あり。細かい土を多く含む。
14. 7SYR 56 明褐色  
比較的土を多く含む。比較的まとまっている。
15. 7SYR 5/6 黄褐色  
粘性あり。
16. 7SYR 5/6 黄褐色  
粘性あり。
17. 10YR 4/6 黄色  
10cm以上の砂山を多く含む。壁面がこのあたりだけえぐわれているので  
その部分に土をこねたてていたと思われる。
- 壁9. 7SYR 4/6 黄色  
粘性あり。細かい土を多く含む。よくしている。
- 壁14. 7SYR 5/6 明褐色  
少しません。しかしにやややけている。
- 壁15. 7SYR 5/6 黄褐色  
粘性は強い。しかし少ないので10cm程の大きなものもある。

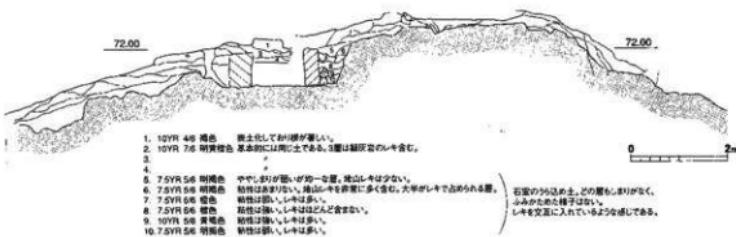
第134図 1セクション実測図



第135図 内部主体土層堆積状況②



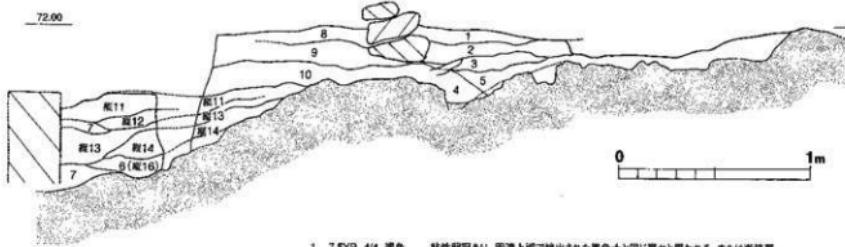
第136図 2セクション実測図



第137図 3セクション実測図

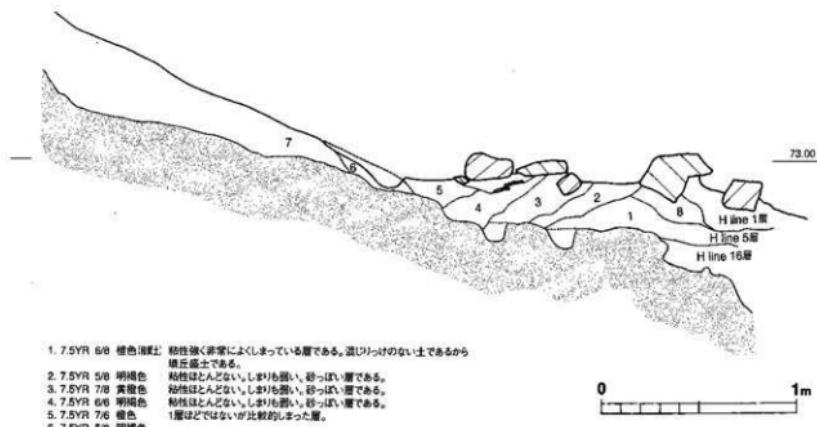


第138図 三田谷3号墳 3セクション図



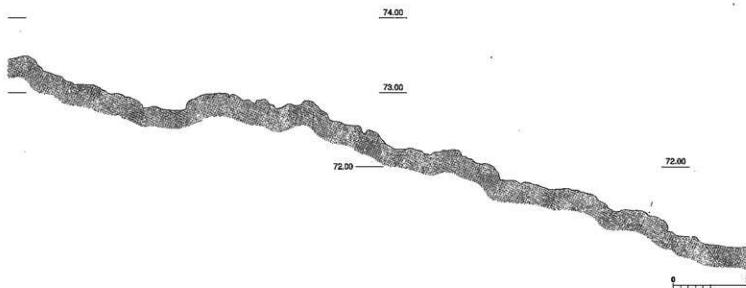
1. 7.5YR 4/4 暗色 粘性細弱カリ。周邊上面で抽出された黒色土と同じ層かと思われる。または消退層。  
 2. 7.5YR 5/4 にじ褐色 粘性あり弱く、しりとりや弱くや均一性のない層で地山風化土が堆積したものと思われる。  
 3. 7.5YR 5/6 明褐色  
 4. 7.5YR 6/6 棕褐色  
 5. 7.5YR 6/8 棕褐色  
 6. 10YR 7/6 黄褐色 地山にキモを量に含む。ほんの少しが地山の風化した砂かレキ。かなり硬質な層。  
 7. 10YR 6/6 明褐色 レキは比較的少ない(5cm以下のレキ)。  
 8. 7.5YR 5/6 明褐色  
 9. 7.5YR 5/6 明褐色  
 10. 7.5YR 5/6 明褐色  
 層11. 7.5YR 5/6 明褐色 粘性強い。5cm以下のキモ多く含む。よくしまっている。  
 層12. 7.5YR 5/6 明褐色 小かいキモを多く含む。しりとりや欠ける。  
 層13. 7.5YR 5/4 にじ褐色 粘性は強い。しりとりがない。レキは少ない。が10cm程の大きなものもある。  
 層14. 7.5YR 5/6 明褐色 小かいキモを多く含む。しりとりや欠ける。  
 層15. 7.5YR 5/4 にじ褐色 粘性は強い。しりとりがない。レキは少ない。が10cm程の大きなものもある。  
 層16. 7.5YR 5/6 明褐色 小かいキモを多く含む。しりとりや欠ける。

第139図 9セクション実測図



1. 7.5YR 6/8 暗色消弱土 粘性強く非常によくしまっている層である。温まりつけのない土であるから  
堆丘盛土である。  
 2. 7.5YR 5/6 明褐色  
 3. 7.5YR 7/6 黄褐色  
 4. 7.5YR 6/6 明褐色  
 5. 7.5YR 6/6 明褐色  
 6. 7.5YR 5/6 明褐色  
 7. 7.5YR 6/6 棕褐色  
 8. 7.5YR 6/6 棕色  
 地山表土層。  
 粘性弱い。1層とよく似ているが、1層ほどしまがない。レキはほとんど含まない。

第140図 6セクション実測図



第141図 6セクション(地山のみ)実測図

1. 7SYR 6S 棕色 この層の上面に薄灰色の1~2cmの層が堆積している。

粘性は大きい。油質を含まない。

2. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。適りつけがない。均一な層。

3. 10YR 5S 黄褐色 地山堆・標のかけた部分を非常に多く含む。他の層と同じよう土と砂質が混じた層。

3. 7SYR 5S 黄褐色 粘性は弱い。1~2cmの層をわざかに含む。他の層と同じよう土と砂質が混じた層。

4. 7SYR 4S 棕色 粘性は弱い。油質を含まない。層厚は1~2cmの小さい層を含む。

5. 7SYR 4S 棕色 粘性は弱い。4倍とよく似ているが、礫が多い。

6. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。層厚は1~2cmの層を含む。

5. 7SYR 5S 棕色 粘性は弱い。油質を含まないが、比較的よくしまっている。

6. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。やややさがりがない。層厚は1~2cmの層を含む。

7. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。1~2cmの層をわざかに含む。他の層に比べ色調が暗い。

8. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。層厚は1~2cmの層を含む。

9. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。層厚は1~2cmの層を含む。

10. 10YR 5S 黄褐色 粘性は弱い。油質を含まない。2cm程度の地山塵少し含む。

11. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。地山塵10層よりさらに少ないと。

12. 7SYR 5S 明褐色 粘性は弱い。油質を含まない。地山塵10層よりさらに少ないと。

13. 7SYR 5S 棕色 粘性は弱い。油質を含まない。3~4cmの層を比較的多く。

14. 7SYR 6S 棕色 粘性は弱い。油質を含まない。層厚は2cm程度の層を多く含む。

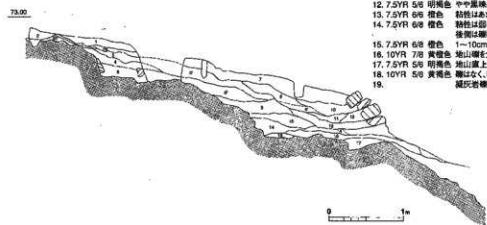
15. 7SYR 6S 棕色 1~10cmの層を除ままで大量的の層を含む。

16. 10YR 7B 黄褐色 地山塵を大量に含む。ほんの少しが地山に混じた砂か砾。かなり硬質な層。

17. 7SYR 5S 明褐色 地山塵を多く含む。層厚は多く含まれ大きなものもある。

18. 10YR 5S 黄褐色 地山塵を多く含む。層厚は多く含まれ大きなものもある。

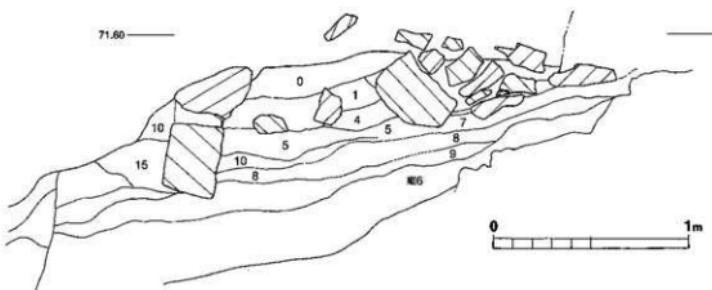
19. 黄褐色層。



第142図 8セクション実測図

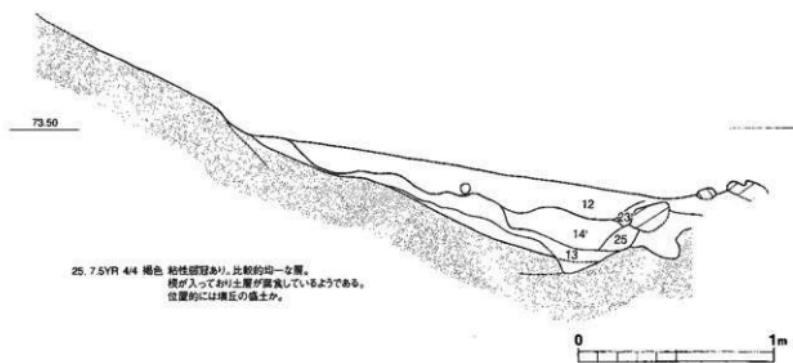


第143図 9セクション実測図



6. 7.SYR 5/6 明褐色 粘性は弱冠あり。レキは比較的少な(2~3cm程のものを少し含む。  
 7. 7.SYR 5/6 明褐色 め一なキメの細かい層。粘性あり(列石状石の置き土)  
 8. 10YR 5/6 明褐色 (地山+キズヒリ層)地山レキを非常に多く含む層。そのためがりがりした硬質な層となっている。(底7層と対応)  
 9. 10YR 5/6 黄褐色 (底6層)とよく似ている。色調も近いがややしおがない。  
 10. 10YR 5/6 黄褐色 レキの量は8層ほどではないが2cm程度の小さな地山レキが含まれる。西側のみこの層が盛土されている。

第144図 8セクション実測図



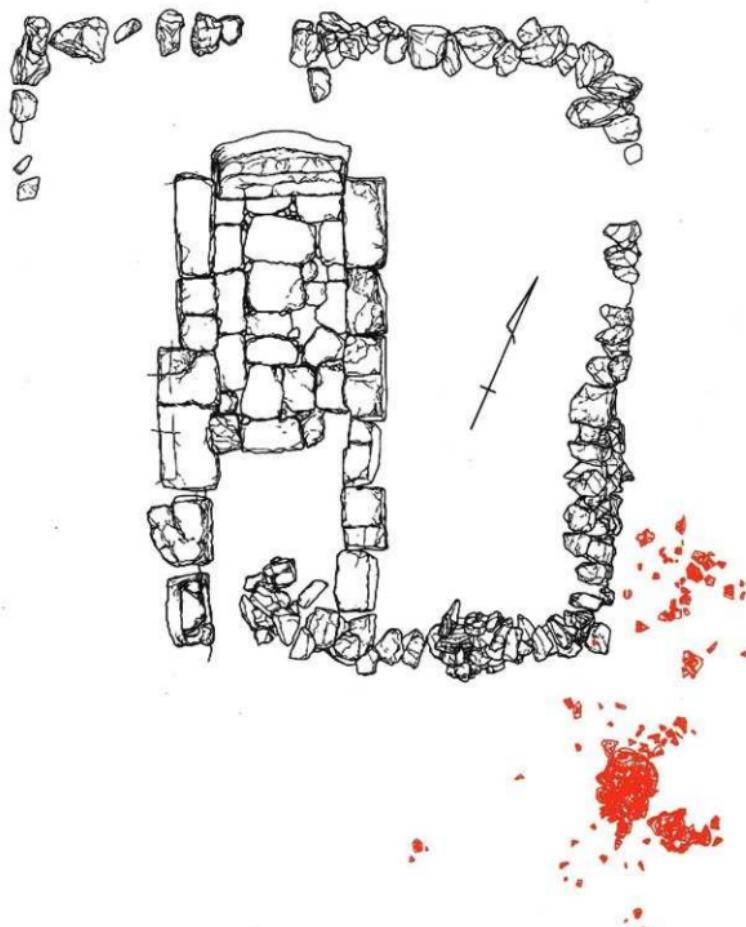
25. 7.SYR 4/4 暗色 粘性弱冠あり、比較的均一な層。  
 積が入っており土層が露食しているようである。  
 位置的には堆丘の島土か。

第145図 5セクション実測図

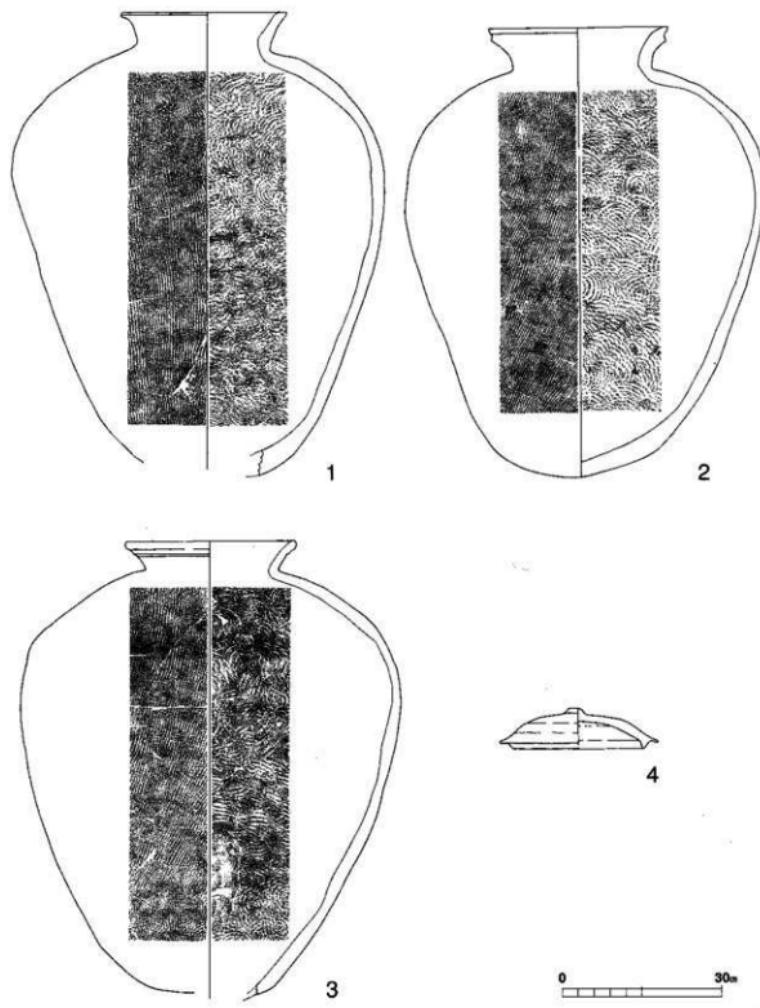
はみられない。奥壁部分の裏込土については、側壁1段目のレベルまでは同様でしまっていないが、それ以上の土については突き固めたためか、しまっているようである。

#### 遺物出土状況

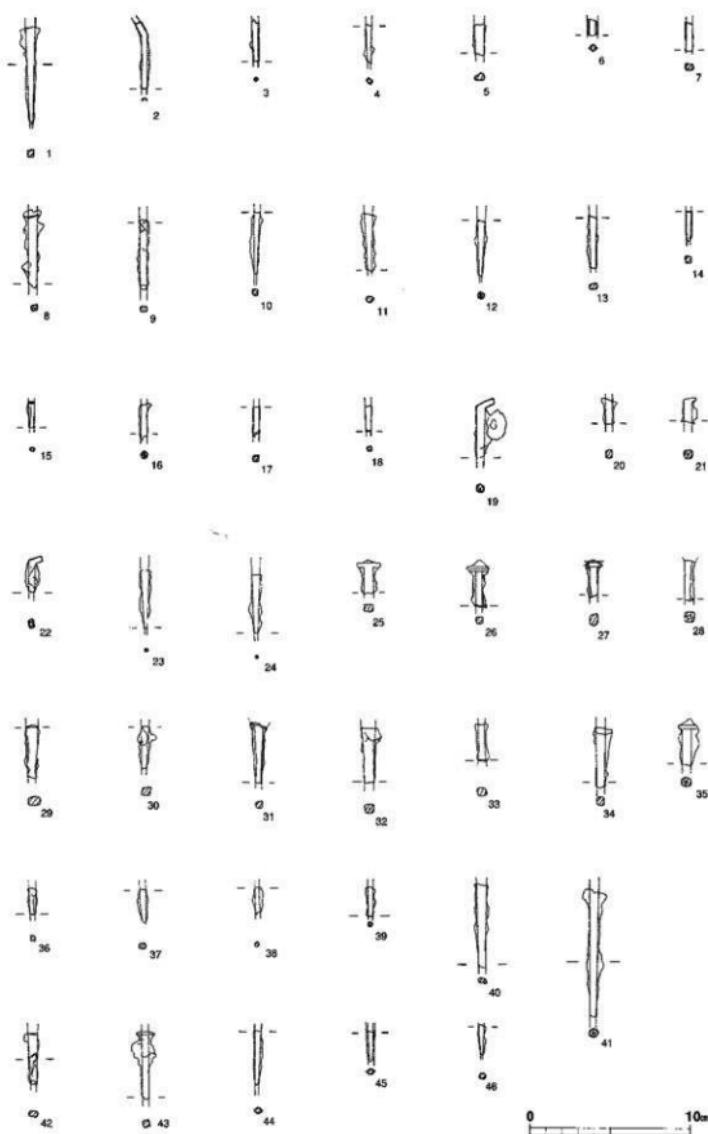
遺物は大きく3カ所にまとまって出土した。その内訳は墳丘の南東隅で2カ所、北西隅で1カ所である。



第146図 遺物出土状況



第147図 遺物実測図（須惠器）



第148図 遺物実測図（鉄釘）

墳丘の南東側の隅付近の地山を平坦に加工している場所から須恵器大甕が2個体分出土している。この2個体とも横倒しになった状態で出土しており、岩盤に接している部分は割れてはいるものの形を保っている。また、若干数の破片は流出しているもののはばまとまっており、土圧などの後世の作用により壊れてしまったと考えられるため、意図的に破碎したとは考えにくい。横倒しになっているといった状態からみても供獻当時の状態は留めていないものと思われるが、地山上からの出土のため、この場所に置かれていたものと考えられる。

一方、墳丘の北西隅よりは須恵器の大甕が1個体及び坏蓋が1点出土した。その出土状況から、ほとんどのは流出していると考えられる。

また、石室内外からは鉄釘が多く出土しており、木棺の存在を窺わせる。

#### 出土遺物

1・2・3は須恵器の大甕である。時期は不明である。

特筆すべき点として、2の底部には径約14cmの焼成後に穿孔した形跡が認められた。また、2と3には焼成時に須恵器片が付着している。

また、時期のわかる遺物としては、墳丘外からではあるが須恵器坏蓋が1点出土している。(4)これは出雲一期にあたり、横穴墓が造墓される時期と一致する。三田谷3号墳の築造年代はこの時期である可能性もある。

なお、遺物の詳細については遺物観察表にゆずる。

#### 小 結

近年、斐伊川放水路建設に伴う発掘調査によって、古墳時代後期から終末期にかけての古墳の調査例が増加しているもののそのほとんどが墳丘・内部主体の大半が残存しておらず、この時期における古墳の詳細を知ることはできていない。そのような中にあって、三田谷3号墳は一辺5.5m~6.0mと小さい古墳であるが外護列石や凝灰岩で構成されたしっかりとした造りの横穴式石室を持ち、この時期の古墳のあり方を垣間見ることができた。

また、横穴墓の造墓時期にあたる須恵器の出土が見られることや、横穴墓のすぐ側に築造していることなど横穴墓との関連をうかがわせる要素も少なくなく、これからの研究に期待したい。

### 三田谷3号墳 遺物観察表

摺図 番号	写真 図版	出土地点	種別 磁 器	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
147-1	図版114	墳丘周辺	須恵器 大甕	口径: 19.6 器高: 57以上 底径	外面: 回転ナデ 平行タタキ 内面: 同心円タタキ	精緻	良好		
147-2	*	墳丘周辺	須恵器 大甕	口径: 21.8 器高: 54.8 底径	外面: 回転ナデ 平行タタキ 内面: 同心円タタキ	黒色砂粒 を含むが 精緻	やや 良好	黄灰色ないし灰 色、上方は自然 釉でオリーブ灰色	須恵器片付着
147-3	*	墳丘周辺	須恵器 大甕	口径: 20.6 器高: 57以上 底径	外面: 回転ナデ 平行タタキ 内面: 同心円タタキ	精緻	やや 良好	暗青灰色 上方は薄く褐色 がかっている	須恵器片付着
-		墳丘外	須恵器 坏蓋	口径: 9.5 器高: 2.5 底径	外面: ケズリのちナデ 内面: 回転ナデ	精緻	良好		

掲図 番号	写真 図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	備 考
148-1	図版115		鉄釘	残存長:1.2 最大幅:6.0	
148-2	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:4.1	
148-3	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:2.5	
148-4	*		鉄釘	残存長:0.5 最大幅:2.3	
148-5	*		鉄釘	残存長:0.8 最大幅:2.0	
148-6	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:1.0	
148-7	*		鉄釘	残存長:0.5 最大幅:1.8	
148-8	*		鉄釘	残存長:1.1 最大幅:4.7	
148-9	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:4.3	
148-10	*		鉄釘	残存長:0.7 最大幅:3.8	
148-11	*		鉄釘	残存長:0.9 最大幅:3.5	
148-12	*		鉄釘	残存長:0.7 最大幅:3.4	
148-13	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:3.1	

挿図 番号	写真 図版	山土地点	種別 磁器	法量(cm)	備 考
148-14	図版115		鉄釘	残存長：0.4 最大幅：1.8	
148-15	*		鉄釘	残存長：0.5 最大幅：1.6	
148-16	*		鉄釘	残存長：0.6 最大幅：2.2	
148-17	*		鉄釘	残存長：1.9 最大幅：0.4	
148-18	*		鉄釘	残存長：0.4 最大幅：1.6	
148-19	*		鉄釘	残存長：1.6 最大幅：3.3	
148-20	*		鉄釘	残存長：0.9 最大幅：1.5	
148-21	*		鉄釘	残存長：0.9 最大幅：1.6	
148-22	*		鉄釘	残存長：0.8 最大幅：2.1	
148-23	*		鉄釘	残存長：0.7 最大幅：3.6	
148-24	*		鉄釘	残存長：0.8 最大幅：3.6	
148-25	*		鉄釘	残存長：1.4 最大幅：2.1	
148-26	*		鉄釘	残存長：1.3 最大幅：2.9	

括弧 番号	写真 図版	出土地点	種別 磁器	法量(cm)	備考
148-27	図版115		鉄釘	残存長:1.0 最大幅:2.3	
148-28	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:2.5	
148-29	*		鉄釘	残存長:0.8 最大幅:3.3	
148-30	*		鉄釘	残存長:1.1 最大幅:2.6	
148-31	*		鉄釘	残存長:1.0 最大幅:3.7	
148-32	*		鉄釘	残存長:1.2 最大幅:3.4	
148-33	*		鉄釘	残存長:0.8 最大幅:2.3	
148-34	*		鉄釘	残存長:1.1 最大幅:3.7	
148-35	*		鉄釘	残存長:1.2 最大幅:2.9	
148-36	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:1.6	
148-37	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:2.0	
148-38	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:1.6	
148-39	*		鉄釘	残存長:0.6 最大幅:1.8	

三田谷3号墳

図版





墳丘（全景）



全景（空中写真）



外護列石（北側）





外護列石（東側）



外護列石（東側）



外護列石（南東角）



5 セクション  
土層堆積状況



5 セクション  
土層堆積状況



5 セクション  
土層堆積状況



7 セクション  
土層堆積状況



A セクション  
土層堆積状況



A セクション  
土層堆積状況



A セクション  
土層堆積状況



B セクション（手前）  
C セクション（奥）  
土層堆積状況



B セクション  
土層堆積状況



石室前庭部分



石室中輪セクション  
土層堆積状況



石室東側 裏込め  
土層堆積状況



石室（正面から）



同上（上から）



石室内土層堆積状況



石室及び墳丘（北側から）



石室内部（正面から）



同上（上から）

石室（上から 落石除去後）



同上（西側から）



同上（東側から）





石室及び墳丘（南側から）



石室内部（床石）



石室内部



袖石



遺物出土狀況



同上



遗物出土状况



同上



同上

遺物出土狀況



同上



同上





遺物出土狀況



同上



同上